

# 『医療現場の会話分析』

D.メイナード

(勁草書房 2004年)

田中 剛太

我々は普段、ごく当たり前のように、「人にニュースを伝えること」をしている。ニュースには、良いニュース、悪いニュース、重大なニュース、取るに足りないニュースなど様々あるが、「ニュースを伝えること」とは、はじめから「良い」「悪い」「重大な」「取るに足りない」といったような性質や価値を持ったニュースを話し手が聞き手に伝える、というものではない。そうではなく、そのような「位置価」(p79)のみならず、そもそもそれが「ニュースであること」も、会話の具体的なやり取りの中で達成されるものなのだ、というのが著者の基本的な立場である。臨床の現場では、医療者が、患者の生死や病状、障害の有無など、患者本人やその家族の人生にとって極めて「重大な」ニュースを伝えるという役割を制度的に担っている。一方、日常の場面における会話では、「取るに足りない」ニュースの伝達がしばしば行われるが、そこでは、臨床現場のような制度的場面とは違い、そもそも「なぜ、今、このことをニュースとして伝えるのか」ということが明白であるとは限らない。そしてこの両者の間においては、著者の言う「意味構成上の危機」という事態の意味合いも違って来るように思える。本訳書は「医療現場における悪いニュースの伝え方のノウハウ」について書かれたものとして読むこともできるが、本稿は、会話分析の立場から、「ニュースを伝えること」一般についての著者の分析のレビューであり、それを通じて今後の研究のた

めの足がかりを探るものであることを断っておく。本書は、臨床の場面と日常的な場面において実際に「ニュースを伝えること」が行われている様々な会話のデータを分析することによって、そこで何が起きているのかを明らかにしているという点でユニークであり、会話分析の事例研究としても意義のあるものである。

著者は「悪いニュース」や「良いニュース」が、我々の社会的世界への関与の瞬間的な中断(p6)、当たり前を受け入れられている日常世界の崩壊(p7)を引き起こし、「意味構成上の危機」をもたらす(p17, 18)としている。例えば「頭の中が真っ白になる」というような状態はこれに相当するかも知れない。その状態を脱するため、会話の参加者は共通の意味に到達するために努力する(p44)のであり、この過程を経て初めて、「良い」「悪い」「そのどちらでもない」ニュースが、ニュースとして、相互行為的に達成される(p47)。それはまた、ばらばらになった社会的世界を再配置し「本当にそうなのだ」と分かってくことを伴う感情的な反応を引き起こす(p7)。

このことに関して、医療現場における会話は、次の点において日常会話とは区別されるべきである。一つは、告知されるニュースの内容が、癌などの重病、知的障害、HIV ウィルス感染などの有無の診断や生死の宣告など、本人や家族の生死や人生に関わる重大なものであることがしばしばあり、少なくとも「告知」が問題に

されるのはそのような重大な場面であるということである。もう一つは、会話の参加者がどういふ者としてその場に登場しているかが明確になっているということ、それと同時に、医療者・臨床家の側が「ニュースを告知する者」であり患者・クライアントとその家族は「告知を受ける者」としてその場に居るといふことが文脈上当然視されている、ということである。つまりニュースの受け取り手にとっては危機でも、送り手にとっては慣行なのである (p169)。

ニュースが「意味構成上の危機」をもたらすという観点から考えると、医療現場におけるニュースはその内容の重大性からしても、受け取り手にとってはまさに「日常の諸前提を粉々に打ち砕く」(p61) 可能性があるということには想像しやすい。少なくとも、意識の高い医療者・臨床家はそのような場面ではそのことに志向しているであろう。良いニュースであれ悪いニュースであれ、受け取り手にとっては、既にそのニュースを知っているという場合を除き「ニュースとしての価値がない」といふことは普通は考えられない(勿論、実際にそういう人がいてもおかしくはないが)。しかし、我々が日常会話において話したり聞いたりするニュースは、もっと取るに足りない、ありふれたような内容のものであることが多い。「ニュースがニュースたりえることは相互行為的に達成される」のだとすると、日常会話においては、悪いニュースであること、良いニュースであること、そしてそもそもニュースであること、といったことは、文脈や状況によって達成されたりされなかったりと、極めて偶然性の高いものであるような気がする。

私に関心を持ったのは「ニュース」のこのような偶然性であり、特に「ニュースがニュースとして達成されない」場合である。著者の分類によれば、「ニュースを受け取ったという証」

を用いることによってニュースの精緻化を思い止まらせる場合 (p101) に相当する。日本語で言えば、ニュースのアナウンスに対して、「あっそう」「ふーん」「へえ」といった言葉を平板なイントネーションで発するような場合である(本書の訳者は「おお」「ああ」「まあ」「あら」「ええ」を挙げている: p97) と言えるが、ここでの「ニュースを受け取った証」、という表現に私は違和感がある。受け取り手から見て、アナウンスされた発話内容はこの時点で既に「ニュース」といってよいのだろうか? 「えっ、本当?!」というような「ニュースであるという徴」や、「そのことなら聞いたよ」といふような「ニュース価値の否定」は、「相手がニュースのつもりでそれをアナウンスした」といふことは認めた上で、アナウンスされた内容のニュース性を判定しているものである。しかし、「あっそう」「ふーん」のような最小限の反応は、「相手がニュースのつもりでアナウンスした」と言うよりは、むしろ、「相手が何かをアナウンスした」といふことは受け取ったが、それをニュースとして価値判断していいものかどうか分からない」といふことに志向しているように思える。それはつまり、「なぜ、今その発話がなされたのか」といふことに対する、それこそ(「頭の中が真っ白」とまではいかずとも)「意味構成上の危機」とでも言うべき状態であり、著者の言い方を借りれば、そのアナウンスによって社会的世界が中断させられ、「何と反応してよいのか困っている」といふことを示しているように思えるのである。そうした「意味構成上の危機」から抜け出して初めて、「ニュース」であることが達成されるのではないか。達成されるか、「ふーん」で聞き流されるか。「聞き流すこと」「関心を払わないこと」も組織的に行われているような気がする。このあたりを今後の研究課題としたい。

---

**医学教育のエスノメソドロジー —医療面接実習と OSCE の相互行為的基礎—**

(平成15年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書)

課題番号: 15330100

発行日: 平成19年3月16日

編集発行: 榎田美雄

〒770-8502 徳島市南常三島町1丁目1番地

(088) 656-9308 E-mail: Kashida@ias.tokushima-u.ac.jp

<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/>

---